

(課程博士・様式7) (Doctoral degree with coursework, Form 7)

学位論文要旨

Summary of doctoral dissertation

専攻：共同教科開発学専攻

氏名：馬場 洸志

論文題目：

アメリカの高等教育機関における Community Engagement Professional に関する研究～サービス・ラーニングコーディネーターに焦点をあてて～

論文要旨：

本研究は、アメリカの高等教育機関における地域参加型学習に従事する専門家の職務内容調査を通し、職員や教員との違い、同専門家による教育参画（学生指導）の意義を明らかにすることを目的としている。サービス・ラーニング（以降 SL）やインターンシップ、ボランティアといった、地域社会と連携し、教室外での学生の学びを促進する教育実践は「地域参加型学習（Community Engaged Learning）」と呼称されており、SL やインターンシップ、ボランティアといった正規課程・非正規課程（準正規課程）の教育実践を包括的に捉えた教育・学習形態である。

日本の高等教育における地域参加型学習の取り組みは、学士課程の質的転換の流れの中で広がってきた。「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業）」と「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」が開始され、これらの取り組みを通して地域社会や企業などと連携したカリキュラムの構築、教室外学修プログラムの開発が促進されてきた。そんな地域参加型学習の運営において欠かせない存在が、学内外との調整・連携を図るコーディネーターのような専門家の存在である。他方、このような専門性を備えたコーディネーターが専任スタッフとして設置されている大学はごくわずかであり、そのほとんどが有期雇用の不安定な立場に置かれており、専門職として確立しているとは言い難い。また、日本の高等教育における地域参加型学習の専門家に関する研究は、コーディネーターのような専門家の重要性の提言に留まっており、地域参加型学習の「専門家」という視点での研究に至っていない。一方で、地域との連携を大学のミッションに掲げることが一般的となっているアメリカでは、地域参加型学習を推進する専門部署が設けられているケースが多い。この地域参加型学習に従事する人材は「Community Engagement Professional（以降 CEP）」と総称されており、専門職として確立され、その研究も先進的である。

よって本研究の意義は、アメリカの高等教育機関における CEP の職務内容調査を通し、職員や教員との違い、同専門家による教育参画（学生指導）の意義を明らかにすることにより、日本における地域参加型学習の専門家の発展に寄与することである。なお本論で詳細に述べるが、アメリカにおける地域参加型学習の中心的取り組みが SL であり、CEP 研

究も SL の台頭とともに発展してきた。よって本研究では、地域参加型学習の中でも SL、CEP の中でも SL コーディネーターに焦点を当て論じていく。

本研究を進めるにあたり、以下 3 つのリサーチ・クエスチョン（以下 RQ）を立てた。

- ① 事務的業務ではなく、教育的側面において、実際の教育現場で SL コーディネーターにどのような職務が求められているのか
- ② 教育参画における教員と SL コーディネーターの違いは何か
- ③ SL コーディネーターによる教育参画の有無は、SL コーディネーターの職務に対する態度や考えにどのような影響を及ぼすか

RQ①では、実際の教育現場で SL コーディネーターにはどのような職務が求められているのかを調査するために、SL コーディネーターの職務記述書分析を行った。その結果、SL コーディネーターには学生指導に関する職務が一番求められており、その中でも学生の活動のリフレクションと事前学習指導が最も高い割合となっていた。この結果を踏まえ、リフレクションと事前学習において、どのような手法を用いているか、何に重きを置いているかについて、アメリカの SL コーディネーターへのインタビュー調査を行った。その結果、SL コーディネーターたちは SL の理論知識をしっかりと備えており、リフレクションや事前学習においてもその基礎理論に基づく様々な手法を用いて取り組むなど、学生指導に取り組む高い専門性が備わっていることが明らかとなった。一方で、SL コーディネーターが教員のような役割で学生に関わっているなど、教員と SL コーディネーターの違いが曖昧になってしまった。また、この調査において学生指導に関与している SL コーディネーターとそうでない者が存在したことも明らかとなった。よって、RQ①を第一調査とし、第一調査から導き出された RQ②と RQ③を第二調査と位置づけた。

RQ②と RQ③を明らかにするために、アメリカの高等教育機関において SL に従事する SL コーディネーターに対してアンケート調査を実施した。RQ②の調査では自由記述形式で回答頂き、その記述の分析結果、教員と SL コーディネーターの違いが、複数のプログラムを同時に進行させる高いマルチタスク能力、良質なプログラム開発・運営のためにはステイクホルダーとの関係構築能力、地域と学生を適切に結び付けるマッチング能力、安全な SL 運営のための危機管理体制構築能力、地域の課題解決能力、リフレクションや事前学習指導など SL に特化した学生指導能力、教員より身近な存在といった点に違いが見出された。

RQ③では選択式で回答頂き、回答者を、教育参画している者を参画群、教育参画していない者を非参画群に分類し、アンケートの平均値の差の t 検定を行った。その結果、「SL の科目・プログラムにおける地域社会への参加の側面は、私がもっと自分の地域社会に関わるにはどうしたらいいかを示してくれた」という「地域社会への関りに対する態度」を問う項目と、「サービス・ラーニングを取り入れた科目・プログラムは、私の業績一覧にとって重要な一行だ」という「自身の専門的職能開発における地域奉仕の影響」を問う項目において有意差が確認された。